

いま生きている過去

三谷 博

持続する歴史記憶の力学をさぐり、対処の方法を考える

第2回 ナショナリズムと「忘れ得ぬ他者」

1. 不都合な記憶への対処法

- 「逃げる」vs.「立ち向かう」
世界の監視 常任理事国問題の失敗
- 加害者と被害者の和解
謝罪から赦しへ、だけか？
事実認識 不再犯の誓い 賠償
当時者性 「国民」枠は絶対か
- 当事者と子孫の関係
犠牲者意識の世代的継承(林志弦)
責任の世代的継承 刑事 vs. 民事

・政治的文脈の理解

善意だけでは解決しない 英知の必要

短期要因： 外交的動機

国内的要因：「愛国無罪」

長期要因： ナショナリズムの力学

とくに 国民史教育 国民感情

2. ナショナリズムの力学

- 定義

特性の共有?

言語、宗教、身体的特徴 etc.

別の理解

1. ある「国家」を基準にして、「我々」と「他人」を
差別する心の習慣
2. その住民への浸透

・代表例

近代日本の政治的死者

日本人： 約3万（維新3万＋700）

外国人： 1000万以上か

この差異 ← ナショナリズム

・東アジアでのナショナリズム形成

	日本	朝鮮	中国
イデオロギー	18世紀後半	日清戦後	日清戦後
政治運動	幕末(1860年代)	大韓・独立協会 (1897)	戊戌変法 (1898)
庶民への浸透	日清戦争	植民地期	抗日戦争

- ・ 歴史記憶の生成と持続性

事実レベルの相互作用

戦時の生成

仮想競争による生成

18世紀の日本における中国

記憶の自立・相互作用へ

- 「忘れ得ぬ他者」現象

本居宣長『古事記伝』 「書紀の論ひ」

『日本書紀』を斥ける

1) 史書への「日本」使用不可

2) 「辺ばみたる題号」

「漢意」批判

・ 一般化

非対称関係（中心vs. 周辺、普遍vs. 特殊）

ドイツ対フランス 旧植民地対宗主国

ambivalence 愛・憎 尊敬・軽蔑

表面と裏面 その入れ替わり

複数性 役割の配賦

朝鮮における中国・日本

中国におけるアメリカ・日本・ロシア

持続性と変化

日本の場合

中国 西洋 中国消滅 アメリカ 中国復活

・教訓

- 1 「忘れ得ぬ他者」は執拗に持続する
- 2 第三者の出現で地位が変わる
- 3 感情は減衰するが、記憶の形は残る

したがって

- 1 いたずらに被害感情を挑発しないこと
- 2 事実を認識し、不再犯の約束・償いをする事
- 3 被害者側の自信回復を助けること

それでも

「国民史」教育の続く限り、被害者意識は続く